

## 令和5年度

### 劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業

#### (地域の中核劇場・音楽堂等活性化)

### 成果報告書

団 体 名	公益財団法人ニッセイ文化振興財団	
施 設 名	日生劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・普及啓発事業	
内 定 額 ( 総 額 )	30,801	(千円)
	公 演 事 業	29,475 (千円)
	人 材 養 成 事 業	0 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	1,326 (千円)

# 1. 事業概要

## (1) 令和5年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数(人)	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	日生劇場開場 60 周年記念 日生劇場ファミリーフェス ティヴァル 2023 公演 音楽劇「精霊の守り人」	2023 年 7 月 29 日(土) ～8 月 6 日(日)	【出演】明日海りお、梅田彩佳、村 井良大、山崎樹範 ほか 【脚本】井上テテ 【音楽】かみむ ら周平 【演出】一色隆司	目標値	11,134
		日生劇場		実績値	9,781
2	日生劇場開場 60 周年記念 日生劇場ファミリーフェ スティヴァル 2023 舞台 版「せかいいちのねこ」	2023 年 8 月 19 日 (土)、20 日(日)	【出演】人形劇団ひとみ座、Co. 山田 うん 【演出・振付・脚本・作詞】山田う ん 【音楽監督・作曲】ヲノサトル	目標値	3,711
		日生劇場		実績値	4,887
3	日生劇場開場 60 周年記念 日生劇場ファミリーフェ スティヴァル 2023 バレ エ「くるみ割り人形」～ 日生劇場版～	2023 年 8 月 25 日(金) ～27 日(日)	【出演】谷桃子バレエ団 【指揮】井田勝大 【演奏】シアタ ーオーケストラトーキョー	目標値	5,193
		日生劇場		実績値	6,920

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和5年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数(人)	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	日生劇場〈オペラを知る〉シリーズ 2023	2023年4月9日(日)、7月2日(日)、9月18日(月)・24日(日)	【登壇・出演】山形治江、栗國 淳、田崎尚美、与那城 敬、新堂由暁、平塚洋子、河原忠之、大沼 徹、相原里美、森岡実穂、長木誠司、柴辻純子、林 正子	目標値	600 (120×5回) ※申込者数目標は625 (125×5回)
		日本生命日比谷ビル7階大会議室、日生劇場ピロティ		実績値	411名 ※申込者数は536名
2	第30回 日生劇場舞台フォーラム 2023	2023年11月10日(金)	【登壇】栗國 淳、アレックスandro・チャンマルーギ、大島祐夫	目標値	来場者数：350 配信視聴回数：1,170回
		日生劇場		実績値	来場者数：316名 配信視聴回数：622回

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
ミッション（社会的役割等）・ビジョンや地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
<p><b>【社会的役割・地域特性】</b> 日生劇場では舞台芸術の振興と普及を通じて「児童・青少年の健全育成」と「豊かな文化の発展」を実現するため、「届ける」「育む」「支える」をミッションに事業を実施している。劇場が所在する有楽町・日比谷エリアは様々な劇場が集積する文化・エンタメの発信地であると同時に、千代田区及び隣接する港区、中央区は子育て世代の人口増加が顕著な地域（R元年からR5年度まで5年間で、全年齢で3.5%、18歳以下で5.2%の人口増）にあることから、特に児童・青少年向けの舞台芸術の創造・発信を通じ、豊かな社会の礎となる子どもたちの情操涵養に努めるとともに、文化環境の向上を目指した。</p> <p><b>【令和5年度事業】</b> 上述の内容に基づいた公演事業として、鑑賞経験のない（少ない）子どもたちに家族そろって舞台芸術を楽しんでもらえるよう、夏休み期間中に低廉なチケット価格で児童向けの舞台作品を上演する「日生劇場ファミリーフェスティバル」を実施した。2023年は日生劇場が開場して60年の周年にあたることもあり、ひとつの演目では例年の倍にあたる8回公演を実施するなど、3演目16公演にて目標を大きく上回る21,588枚のチケットを販売した。特に2演目は新制作且つ人気の絵本や児童文学の初舞台化であり、当劇場独自の創造活動であると同時に、原作等の人気を足掛かりに多くの来場者を得たことは、ミッションの実現に寄与したものと考えている。なお、事業番号1においては2023年6月26日に提出の事業変更届のとおり、要望時に12回とした公演回数を8回に変更して実施した。普及啓発事業では、日生劇場のもう一つの柱であるオペラ公演における鑑賞障壁を下げる取り組みとして、二つの事業を実施。「日生劇場〈オペラを知る〉シリーズ」は登壇者と会場調整の都合で4回予定していたレクチャーのうち1回を、前年度に変更したが、その他は計画通り実施することが出来た。</p>
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
<p><b>【文化的意義】</b> 公演事業において新制作を行った2演目（音楽劇「精霊の守り人」、舞台版「せかいいちのねこ」）は、いずれも我が国を代表する作家による人気シリーズを原作とし、その初の舞台化となったことで、高い注目を集めた。それらを日生劇場の舞台サイズでの上演に相応しいクオリティ（いわゆる児童劇としてではなく、大人向け一般公演に遜色ない体制・規模）で制作したことは、公演に関わる舞台関係者にとって貴重な創作の場となり、来場者の文化的需要を満たし、且つ日本を代表する文学の舞台作品の創造を通じて舞台芸術の振興にも寄与することが出来た。普及啓発事業では、本プログラムを経て、その後上演したオペラ公演（※助成対象外）の来場者アンケートにおいて、オペラ初鑑賞となる方の割合が例年に比べ上昇したことから、オペラの普及にも貢献できたものと考えている。</p> <p><b>【社会的意義】</b> 公演事業では、鑑賞経験のない（少ない）子どもの来場のため、舞台芸術に対する関心が高くない保護者にも情報を周知し、購入意欲を喚起するべく、多様な広報展開や低廉なチケット価格設定などの取り組みを行っている。中でも一都三県の自治体、教育委員会、教育関係団体の協力・後援による広報展開（※（2）有効性で詳述）は、本事業の社会的意義が広く認めて頂いていることの証左であり、これらの協力による来場者は、全体の31.3%に達した。</p> <p><b>【経済的意義】</b> 専門的調査は行っていないが、公演事業における低廉なチケット価格設定で家族連れやライトユーザーの来場を促す施策は、将来的な観客・舞台芸術（市場）の拡大に寄与しているものと考えている。また、コロナ以降引き続き厳しい環境で舞台芸術に従事する関係者に対する事業費の支出や、公演等に広範から来場する方々の消費活動なども、事業実施に伴う経済的意義と言えるのではないかと考えている。</p>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

**【公演事業】** ※①～④は事業番号1～3共通の目標

①チケット販売率：実績 101.8%／指標 77% (達成)

②会員占率：実績 57.1%／指標 39% (達成)

③作品満足度：実績 92.9%／指標 92.0% (達成)

④公演案内率：実績 84.5%／指標 81% (達成)

より多くの子どもたちに舞台芸術を届けるため、広報面では教育委員会や教育関係団体の協力を得て、日生劇場から半径50km圏内の幼稚園・小学校へパンフレットを送付しており、④はその案内率(送付率)となる。R5年度は圏内にある5,993の幼稚園・小学校等のうち84.5%に送付、指標を上回り、より広範に公演情報を周知することが出来た。そこから実際の来場(=チケット購入)に繋げ、同時に必要な収入を確保するため、①チケット販売率、②会員占率(チケット購入者における劇場会員の占有率)の指標を設定し、目標を達成するために認知度の高い原作の選定や低廉なチケット価格、子ども料金の設定など、舞台芸術の鑑賞に慣れていない子どもや保護者の来場ハードルを下げる方策や、会員向けの情報提供を実施した。結果はいずれも指標を大幅に超過、目標達成に貢献した。なお、①の実績値が100%を超過しているが、これは好調な券売状況を鑑みて見切れ席等の売り止め席を追加開放したためである。③の作品満足度は来場者アンケートにより捕捉しており、直近3年の実績から指標を設定しているため高止まりの傾向にあるが、こちらも目標を達成、作品のクオリティにも高い評価を得たものと考えている。

なお、事業番号1において先述のとおり要望時12回から申請時に8回へと公演回数を変更、伴って①の指標の分母となる販売可能数が2/3に減少した。これに伴う入場者の指標は数値で7,423(割合は77%のまま)となるため、申請書ではそのように変更した。

**【普及啓発事業】** ※事業番号1=①②、事業番号2=③④⑤

①1回あたり申込者数：実績 134名／指標 125名 (達成)

②企画満足度：実績 81.2%／指標 87.0% (未達成)

③参加者数：実績 316名／指標 350名 (未達成)

④視聴回数：実績 622回／指標 1,170回 (未達成)

⑤企画満足度：実績 90.2%／指標 96% (未達成)

事業番号1「<オペラを知る>シリーズ」は、特にレクチャーにおいて無料且つ事前予約制ということもあり当日欠席が多いことから、①は参加者数ではなく申込者数の指標とし、超過達成した。但し欠席が多い(欠席率23%)ことも事実であり、参加機会の公平な確保の観点からも、今後はワンコインなどの有料化も視野に検討していく。事業番号2「舞台フォーラム」においては、参加者数指標を(有観客実施時の)直近3年の実績から350名と設定したが、公演スケジュール等の都合で平日夜間の開催となったことで、指標を1割程度下回った。またコロナ禍以降、多様な参加方法の確保の観点から動画配信を行っているが、この2年は来場者数の回復に合わせて視聴回数が減少しており、指標設定の際に実際のニーズを測りきれなかったと考えている。今後は配信動画の作成コストとの兼ね合いで、適切な方法を検討していく。なお、両事業とも企画満足度(②⑤)が指標を下回ったが、直近3年の実績から指標を設定していることに加え、アンケート回収数が少ないことから、少数意見が過大に反映される傾向がある。頂戴した意見は今後の企画・運営に反映させながら改善を図っていくが、本事業の目標は概ね達成できたと考えている。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

助成対象となった公演事業「日生劇場ファミリーフェスティバル」は、舞台鑑賞経験のない（あるいは少ない）幼児や小学生が、複数の公演ジャンルのなかから気になる演目を選択し、家族と気軽に来場出来る催しとして、毎年夏休み期間中に実施しており、R5年度も7月29日（土）から8月27日（日）までの約1か月間で、3演目16回の公演を実施した。夏休みの家庭行事として予定してもらうため、公演情報の周知は4月中旬ごろから本格化させ、GWの家庭行事が終わった5月中旬ごろから販売を開始するというスケジュールで進行している。（2）有効性で詳述したとおり、本事業のチケット販売率は目標を超過達成したこともあり、事業期間の設定については特に課題はないものと考えており、また日生劇場は1か月単位での貸し劇場事業を行っているために主催公演時期を分散できないという制約もある中では、R5年度の事業期間の設定は適切であり、また計画通りに実施できたものと考えている。なお、事業期間は変わらなかったが、事業番号1において先述のとおり要望時12回から申請時に8回へと公演回数を変更して実施した。

普及啓発事業では日生劇場で上演する（主催及び共催）オペラ作品を題材に、オペラへの理解を深め、普及を図るため、作品の上演スケジュールを前提に実施時期を調整している。事業番号1「<オペラを知る>シリーズ」は、オペラ公演のチケット発売時期に前後する形で実施するプレコンサートにより、まずは気軽に歌曲に触れて頂くことでオペラへの興味を喚起し、次に制作が進む過程で実施するレクチャーにて演出家や指揮者などの公演関係者をゲストに、作品理解を深める機会を提供することでオペラ鑑賞者の裾野を拡大するという建付けのため、現在の事業時期設定は適当なものと考えている。但し、予定していたレクチャーの1回を会場とした外部施設の空き状況と登壇者スケジュールの都合でR4年度の実施としたため、事業回数が1回減少した。事業番号2「舞台フォーラム」は、実際に上演中のオペラ作品を題材に制作過程の裏側を紹介する事業のため、公演期間中の実施が前提となっている。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

R5年度は、新型コロナウイルスが5類に移行したことで舞台芸術業界における様々な制約がなくなり、制作環境においてはコロナ以前と同じ状況に戻ってきた。また制作現場においても近年の働き方改革の流れや、長らくのコロナ禍で慣習化してきた労働時間の短縮や分散化により、舞台制作に関わる人たちの労働環境が改善されつつあることを実感する年度となった。一方それにより、以前と同じアウトプットを達成するためのコスト（人員・期間）が増加、また急速に進んだ円安や燃料・資材の高騰と相まって制作コストが上昇したことから、公演制作においては収支バランスのコントロールで難しい舵取りを迫られることになった。加えて劇場全体の予算において大型助成金の不採択による大幅な収入減が生じたため、当初予算から保守的な執行姿勢での進行となった。

先述のとおり公演事業の事業番号1において公演回数を要望時の12回から申請時に8回に変更して実施したが、助成対象経費の支出では、公演事業において交付申請時を100%としたときに約105%と、概ね計画通り執行することが出来た（超過の主因は好調なチケット販売による販売手数料等の増加）。普及啓発事業においては同じく約88%と若干下回った。要因は上述のとおり催しの回数が1回減ったことによるものであり、執行面では計画通り推移したと考えている。一方で収入では公演事業において交付申請時を100%としたときに140%と大幅な増収となった。これは（2）有効性で詳述のとおり公演事業のチケットがすべての公演で完売となったことによるものである。普及啓発事業においては同じく約50%となったが、これは事業番号1における共催団体との費用分担方法を見直したことによるもので、当該レクチャー1回分の支出減と相殺されていることから、概ね計画通り進めることが出来たと考えている。

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

日生劇場は2023年に開場60周年を迎えた。これまで継続して児童・生徒を対象に様々なジャンルで芸術鑑賞教室公演を実施し、その累計招待者数は800万人を超えたほか、1993年からは家族そろって（大人も）楽しめる「日生劇場ファミリーフェスティバル」を開始、毎年2万名前後の来場者を迎えている。

**【文化拠点としての日生劇場】** 日生劇場の周辺には帝国劇場、東京宝塚劇場、東京国際フォーラム、歌舞伎座など、我が国の舞台芸術やエンタメを担う劇場が集積している。また劇場が隣接する港区や中央区は子育て世代の人口流入により18歳以下人口の増加が続くエリアでもある。一方このエリアにおいて大劇場サイズで子ども向けの本格的な舞台作品を上演する劇場はなく、当劇場は「日生劇場ファミリーフェスティバル」を通じて、30年以上にわたって子どもたちに向けた作品を創造・発信してきた。また日本初の本格的な海外引越公演となったベルリン・ドイツ・オペラによる柿落とし公演以降、継続してオペラ作品の制作・上演を続け、我が国のオペラ文化の振興を図っていることから、オペラに関連した普及啓発事業にも注力している。

**【制作団体としての日生劇場】** 主催公演事業の多くを自主制作するなかで、制作ノウハウや舞台関係者とのコネクションを培ってきた。携わるプランナーの多くは当劇場での経験を通じ、子どもには作品の本質的な良し悪しを見抜き、評価する能力があるため、大人向け作品以上に妥協を排して本気で制作に向き合う必要があると認識しており、「日生劇場ファミリーフェスティバル」公演の大人の来場者からは毎年、「子どもには難しいかと思っていたが、子どもは舞台に集中し、自分はそれ以上に感動した」という趣旨のアンケートを頂戴している。また、オペラ演出家の栗國淳が芸術参与を務めており、オペラ公演や子ども向け公演の演出を行うだけでなく、他の作品でも制作担当者やプランナーとの話し合いを重ねることで、主催公演全体の芸術性を担保している。

**【他団体との連携・協力】** 先述のとおり1都3県の自治体、教育委員会、教育関係団体等の後援・協力で子どもたちに公演情報を届けているほか、実演団体としては在京バレエ団（R5年度は谷桃子バレエ団）や人形劇団ひとみ座との協力関係を構築、毎年の事業に活かしている。また、規模の大きな演劇系演目では、これまで東宝（R4年度）やNHKエンタープライズ（R4年度・R5年度）といった制作団体とも協力し、作品クオリティの向上を図ってきた。また、長年各地で巡回公演を実施する中で培った劇場ネットワークを活用して全国公演を実施している。

上記の特色を活かし、R5年度に実施した公演事業においては、子ども向けに3演目の公演を上演した。自主制作となった2演目（事業番号1、2）はいずれも演劇系作品の新制作で、子どもを中心に多くのファンを抱える原作の舞台化に取り組んだ。クラシックコンサートやバレエといった習い事などで親しみのある芸術分野と異なり子どもの集客が難しい演劇演目にも関わらず、いずれの公演においてもチケットが完売、多くの子どもたちが来場した。また、地元自治体による鑑賞支援事業やスーパーマーケットのキャンペーンに採用されたことで、新しい層の来場者を得ることも出来た。以下は本助成の対象外にはなるが、この2演目で全国8都市において芸術鑑賞教室公演を実施、22回の公演で28,181名の児童を招待した。また枚方、新潟、旭、岩国、茅ヶ崎の5都市においては有料一般公演を実施、日生劇場にアクセスできない地域の子どものたちにも作品を届けることが出来た。後者は現地主催者が公演にかかる経費を負担する形での上演であり、演目に対する期待値だけでなく、当劇場が長年取り組むことで積み上げてきた子ども向け舞台作品への信頼感や評価、これまで構築してきた劇場ネットワークがあつてのことと考えている。

これらのことから、R5年度も、当劇場のおかれた地域性を踏まえ、日生劇場への来場者や巡回公演先の劇場等の期待に応えるような事業を実施することで、地域の文化拠点として貢献することが出来たと判断している。

## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

R5年度の助成対象となった公演事業3演目、普及啓発事業2事業の実施をとおり、質の高い舞台芸術を提供、あるいは鑑賞へと繋げることで、ミッションの実現に向けて取り組んだ。

**【公演事業 事業番号1 音楽劇「精霊の守り人」** 過去にTVドラマやアニメ化もされており、多くのファンを持つ児童文学を初の舞台化。初めて舞台を鑑賞する子どもたちにも分かり易いよう台本や演出に工夫を凝らしたほか、作品イメージやファンの期待を裏切らないよう、作品上重要なアクションシーンの充実と、映像や照明による精霊や呪術といったファンタジー要素のリアルな描写に注力した。原作ファンからは原作を再現した世界観や、舞台版としての仕上がり、音楽（歌唱）との相乗効果を評価するコメントが寄せられたほか、子どもたちからも「アクションが格好良かった」「迫力ある舞台だった」などの感想を得た。また全国公演の共同主催者に対し、本作品をつうじて舞台制作の過程を学ぶ視察の受け入れや若手職員向けの研修等を実施した。

**【公演事業 事業番号2 舞台版「せかいいちのねこ」** 脚本・演出・振付に、我が国を代表するコンテンポラリーダンスカンパニー「Co. 山田うん」主宰の山田うん氏を起用。脚本から一貫して同氏がクリエイションを手掛けることで、人形を用いた演劇的表現とダンスなどの身体表現を高いレベルで融合したほか、ヒグチュウコ氏の原作を忠実に再現した人形、舞台美術、衣裳により、「せかいいちのねこ」の世界観を舞台上に可視化することが出来た。来場者アンケートによる公演満足度でも、5段階評価のうち上位2段階の占める割合が95.1%と、近年では最高水準を達成、作品クオリティの面でも成功を収めた。また、制作現場にアートマネジメントを学ぶ大学生をインターンとして受け入れた。

**【公演事業 事業番号3 バレエ「くるみ割り人形」～日生劇場版】** 「物語バレエ」を得意とする谷桃子バレエ団を起用、日生劇場オリジナルとなる改訂演出・振付にて上演した。改訂により物語性を高めることで鑑賞経験が少ない子どもたちの理解を深めたほか、バレエ作品の演奏に定評のある井田勝大とシアターオーケストラキーヨーによる高水準の演奏を届けた。また当劇場では初めて一般公募の子役オーディションを実施。123名の応募から選出された32名が4か月間の稽古を重ねて本番に臨んだ。プロの舞台に出演することで、子どもたちが実践的に舞台芸術に関わる機会を創出した。また日本テレビが子役密着取材を行い、9月11日のnews every（関東ローカル）にて放送、本事業の取り組みが多くの方に周知された。

**【普及啓発事業 事業番号1 日生劇場＜オペラを知る＞シリーズ】** 専門家や演出家、ソリスト等を講師・出演者に迎え、5月上演のオペラ「メデア」を題材に原作ギリシア悲劇の背景を、11月上演のオペラ「マクベス」を題材にイタリア・オペラの系譜を、同じく11月上演のオペラ「午後の曳航」では演出の宮本亜門の魅力を掘り下げるレクチャーと、上演作品を中心にドイツ・オペラの系譜をたどるプレコンサートを実施した。主催公演の「メデア」「マクベス」のアンケートでは、「初めてオペラを鑑賞する」来場者の割合がそれぞれ11.5%、13.2%と例年に比べ倍近くに達したことから、本事業における普及の取り組みに一定の意義があったと判断している。

**【普及啓発事業 事業番号2 第30回 日生劇場舞台フォーラム】** オペラ「マクベス」の上演期間中に、実際に上演中の舞台を用いて実施。同作品のプランナー陣を登壇者に迎え、演出、美術、衣裳、照明のプランや製作過程をスライドなども用いて紹介、舞台上での装置転換のデモンストレーションや衣裳の展示を行い説明した。質疑応答では、オペラ鑑賞経験のない来場者から舞台面に傾斜をつけた「開帳場」舞台の演出的効果について質問が出るなど、来場者のオペラへの関心に応えることが出来た。

以上のことから、質の高い舞台芸術の創造・発信や普及のための活動である本事業を通じて、当劇場のミッションに沿った事業計画の進行とともに、地域の文化芸術の発展に資することが出来たものと考えている。



## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

日生劇場では舞台芸術の振興と普及を通じて「児童・青少年の健全育成」と「豊かな文化の発展」を実現するため、舞台作品の制作・上演を行う公演事業を中核とした事業活動を行っており、そこに舞台芸術を楽しむ人々の裾野を拡大するための普及啓発事業や、普及的観点を取り入れた広報活動を組み合わせることで、「届ける」「育む」「支える」という劇場ミッションの達成に向けて取り組んでいる。

日生劇場の公演事業には、本助成事業の対象となる①日生劇場ファミリーフェスティバル公演の他に、②オペラ公演、③芸術鑑賞教室事業（日生劇場公演／全国公演）、④全国一般有料公演があり、③芸術鑑賞教室事業全国公演及び④全国一般有料公演では、主に①で制作した作品を巡回させていることから、特に助成対象となる①の事業を改善・発展させていくことは、当劇場のミッション実現のために不可欠であるといえる。また、普及啓発事業としては、主に②の鑑賞機運を高める各種催しの他、①におけるチケット価格設定や③などの公演も、舞台芸術の普及に資するものとして取り組んでいる。

当劇場では当該年度の公演制作を開始する前に、企画・制作を担当する職員と各部の責任者及び財団の常勤役員による協議により、各公演の定性的・定量的な目標とその達成のために取るべき方策を決定、各カンパニーの演出家等プランナーに共有することで、作品の方向性と劇場の目標の一致を図っている。また公演終了後には同じメンバーが、来場者アンケートの分析と各職員・役員による公演内容の評価、制作担当者のレビューに基づき、作品のクオリティ、収支結果や広報・宣伝等の取り組みから総合的に各公演の目標達成度合い及び劇場ミッションへの貢献度合いを評価し、次年度以降の事業改善を図る評価会を実施している。

本事業をはじめとした主催事業では、事業を企画し、制作過程を適切に管理・進行する専任のアートマネジメント人材（6名。平均経験年数10年）が、作品の芸術性を担保する芸術参与と相談を重ねながら業務にあたっている。また主催公演・貸劇場公演のいずれにおいても、日生劇場での公演においては舞台、照明、音響の各セクションで専任の技術部職員（17名。平均経験年数16年）が、劇場に常駐する委託業者のスタッフとともに業務にあたっているほか、広報・票券・案内業務は劇場部職員（9名。平均経験年数15年）が業務を担っている。これら職員の大半は正規雇用職員であり（正規雇用率91%）、劇場運営という専門性の高い分野において安定的な人材確保を行うとともに、新卒採用を含めて長期的視点で人材を育成することで、上述の主催事業におけるPDCAサイクルに基づいた事業運営とあわせて、高いクオリティで事業を実施する環境を整えている。

当劇場の主催事業においては、日生劇場における有料公演の入場料等の収入に加え、日生劇場の設置者である日本生命保険相互会社からの寄付金・協賛金、行政や民間の助成金、補助金、寄付金等を財源に、公演等の制作を行っており、また上述の④においては、入場料収入を現地主催団体（劇場）が得る代わりに、当該地域での公演の実施にかかる経費の一部または全部を負担頂いている。なお、一般的に公演制作にかかる経費は上演回数が増えるほど1公演あたりのコストに抑制効果が認められることから、本事業（①）において制作した公演を前述のとおり③や④で巡演させることは、当劇場の公演事業を効率的且つ持続的に実施していくためにも不可欠な取り組みである。

以上のことから、本事業は事業面、人材面、財務面のすべてにおいて当劇場組織を持続可能なものとし、劇場ミッションを達成していくために重要な事業であり、R5年度においても本事業を計画通り実施し、成果を得たことで、ミッションの達成に向けて前進出来たものと考えている。